



久留米市立三瀧小学校 学校だより No.11

ぎんなん

令和5年2月27日
校長 原文也
児童数 474名

学校教育目標 「未来を拓く子どもを育てる三瀧小の全人教育」

春はそこまで

毎朝、校門や児童昇降口の前で登校してくる子どもたちを出迎えている時間が、私にとって、とても大切に心が満たされる幸せなひとときです。4月当初に比べると、自分から進んであいさつをする子どもが徐々に増えてきています。遠くから大きな声であいさつをする子どもやきちんとお辞儀をしながらあいさつをする子どももいて、とても感心しています。なかには、私があいさつをしても、ピクリとも反応せずそのまま私の横を通り過ぎていく子どももいますが……。まずは、474名の子どもたち全員が登校してくることを最優先に考えています。

2月中旬から、ミニ公園にある梅の木が次々と開花し、その美しさが日に日に増してきています。花の色が清楚な白色で、春はそこまで近づいてきていることを実感しています。

寒い日と暖かい日の寒暖差や朝晩の気温の高低差が大きく、体調を崩しやすい時期です。しかし、多くのご家庭で、お子さんの体調管理を十分に行っているおかげで、子どもたちが元気に登校することができています。ありがとうございます。保護者の皆様や地域の皆様も、体調には十分留意され、くれぐれもご自愛ください。



お互いの視点から考えて人権を大切に(5年生)

2月3日(金)、城島・三瀧地域人権擁護委員の姉川先生、稲益先生、高口先生にご来校いただき、4・5・6校時に5年生の各学級で「人権教室」を実施していただきました。まず、人権擁護委員の役割や合理的配慮について、子どもたちに分かるように具体的な事例を紹介しながらお話をされました。そして、「なんでバイバイするとやか？」「友だちほしだけなのに」という絵本の教材を使って、人権について考える授業をしていただきました。

「なんでバイバイするとやか？」は、地域の小学校に通う「きんじ君」の視点から特別支援学校に通っている「てつお君」の言動や思いにふれる場面を、「友だちほしだけなのに」では、「てつお君」の視点から「きんじ君」の言動や思いにふれる場面を設定した学習でした。どの学級においても、子どもたちは、同じ場面を地域の小学生、特別支援学校の生徒それぞれ



の視点から考え、お互いの言動や思いについて深く考えていました。そして、お互いの視点から相手のことや自分のことを考えることで、自他の違いを認め、受け入れながら、よりよい人間関係をつくっていく大切さをとらえることができました。

普段の生活の中で、「人権教室」で学んだことを生かし、いじめや差別などを絶対に許さず、みんなが楽しいと思える学級や学校をつくってほしいと思います。

民謡にトライ（4年生）

1月26日(木)、4年生は「民謡にトライ」の学習で、地域の「筑後酒造り唄保存会」の方々から、民謡「酒造り唄」を教わる出前授業をしていただきました。この出前授業は、10年以上前から城島町と三潴町の小学校で行われていますが、新型コロナウイルス感染症の影響で3年ぶりの実施となりました。

保存会の方が、酒どころとして有名な城島・三潴地域の酒造りの歴史について説明された後、酒米を洗う作業をする時に歌われてきた「米洗い唄」を教わりました。子どもたちは、尺八の伴奏に合わせてリズムよく手拍子しながら「ハアー、ヨイショ、ヨイショ！」と元気の歌声を響かせ、民謡を歌う楽しさを味わっていました。



どんなクラブがあるのかな（3年生）

クラブ活動の目的は、望ましい人間関係の形成と個性の伸長を図り、集団の一員として協力して活動し、自主的な態度を育てることです。4年生以上の子どもたちが参加し、年間9回（各学期3回ずつ、毎回60分間）実施しています。本校には、「屋外スポーツ」「中庭レクリエーション」「卓球・バドミントン」「オセロ・将棋」「実験・工作」「調理・手芸」「パソコン」「音楽」「昔遊び」「イラスト」と全部で10のクラブがあります。



2月14日(火)は、4月から新たに参加する3年生が、各クラブの活動の様子を知るために見学をしました。それぞれのクラブの部長さんなどから活動内容について説明を聞いた後、実際に活動している様子を見せてもらったりしました。子どもたちは、初めて目にするクラブ活動に興味津々の様子でした。特に、自分が興味・関心をもっているクラブでは、身を乗り出すように見学している姿が見られました。

馬頭琴ミニコンサート（2年生）

2年生は、国語で「スーホの白い馬」の学習をしています。この物語の舞台はモンゴルの草原です。あらすじを簡単に紹介します。

よく働く羊飼いの少年「スーホ」は、ある日、地面に倒れて、もがいていた生まれただばかりの小さな白い馬を見つけました。スーホが、心を込めて世話をしたおかげで、子馬はすくすくと育ちました。殿様が開いた競馬の大会に出て一等になると、殿様に白馬を奪われてしまいます。白馬は、決死の思いで逃げ出し、スーホのもとに戻ってきますが・・・殿様の理不尽な仕打ちのせいで、物語は悲しく切ない結末を迎えます。スーホは白馬の亡骸で、先端が馬の頭の形をした楽器「馬頭琴」をつくります。スーホが奏でる馬頭琴の音色は美しく響き、聞く人の心を揺り動かすのでした。

2月24日(金)、子どもたちにとって馴染みのない馬頭琴を身近に感じることができるよう、馬頭琴奏者のドラン先生と中村先生をお招きし、ミニコンサートを開いていただきました。モンゴルの草原の映像をバックに、民族衣装を身にまとったドラン先生と中村先生の姿やその美しい音色に、どの子どもにとっても感動していました。この経験を通して、子どもたちは、スーホと白馬の心のつながりをより深く読み味わうことができることだと思います。

